

加齢に伴う妊娠偶発合併症に関する研究

1) 要約:

加齢に伴って増加する妊娠時偶発合併症には糖尿病(特に妊娠性糖尿病)、妊娠中毒症、子宮筋腫があり、いずれも加齢とともに直線的に増加した。またこれらにおける母児の予後をみると30-35歳以上では胎児仮死や児の小児入院が増加し予後不良となった。

2) 見出し語:

加齢、妊娠偶発合併症

3) 研究方法:

まず東京都母子保健サービスセンターで1988年から1990年に集計された33,825名を対象に各種妊娠偶発合併症の年齢別頻度を検討し、加齢によって増加する妊娠偶発合併症が何であるかを検討した。その上で平成4年度に得られた3373名のretrospective dataをもとに加齢によって変化する妊娠時偶発合併症の年齢別頻度および加齢による母児の予後に及ぼす影響について検討した。また加齢と関係の深い妊娠中毒症についても当研究班で検討した。

4) 研究結果:

東京都母子保健センターから得られた成績では加齢とともに増加する妊娠時偶発合併症は腫瘍では子宮筋腫、物質代謝異常では糖尿病、腎、自己免疫疾患では本態性高血圧症、内分泌疾患では甲状腺疾患、脳神経疾患ではてんかんが考えられた。よってこれら疾患についてretrospective dataを基に母体年齢別頻度および母児の予後について検討を加えた。

1. 子宮筋腫:

筋腫合併妊娠はretrospective studyの対象3365名中77名(2.3%)に認められ、加齢とともに直線的に合併頻度は増加し、35-39歳(3.7%)、40-44歳(7.8%)となり、筋腫合併妊娠の

うち、87%が30歳以上、45.5%が35歳以上であった。また、筋腫合併妊娠を対象群と比較すると、産科新生児合併症では30歳未満では切迫流早産による入院の頻度が筋腫合併妊娠で高くなる(15% vs 21%)のみで、他の合併症の頻度には差がみられなかった。しかし、30歳以上の合併妊娠では切迫流早産の入院以外に胎児仮死および不妊症を合併する頻度が高く、35歳以上であればさらにその傾向が強くなった。

2. 糖尿病:

妊娠性糖尿病および糖尿病合併妊娠はいずれも加齢とともに増加するが、妊娠性糖尿病は加齢とともに直線的に増加するのに対し、糖尿病合併妊娠は35歳-40歳以降に急増する傾向を認めた。

3. 妊娠時高血圧症:

3-1. 本態性高血圧症:

本態性高血圧症を合併したものは3365名中282名(8.4%)であり、軽症妊娠中毒症は36例(12.8%)、重症妊娠中毒症は12例(4.3%)に発症した。胎児仮死は39例(13.8%)、胎児死亡は3例(1.1%)に認められた。児の予後では小児科入院が56例(19.9%)、NICU入院が19例(6.7%)であった。年齢別に妊娠合併症および児の予後をみると、小児科入院数は35歳以上の群で有意($p < 0.05$)に増加した。

3-2. 妊娠中毒症:

東京都母子保健サービスの統計成績による年齢別頻度(%)の検討では妊娠中毒症軽症は19歳以下が9.9%、20-24歳が9.6%、25-29歳が9.6%、30-34歳が11.0%、35-39歳が14.1%、40-44歳が17.2%、45歳以上が28.6%と35歳を越えると急速に増加する。また、妊娠中毒症重症は19歳以下2.8%、20-24歳が1.5%、25-29歳が1.4%、30-34歳が1.6%、35-39歳が

2.8%、40-44歳が5.6%、45歳以上が14.3%となり、19歳以下および35歳以降に増加することが明らかとなった。さらに妊娠中毒症は本態性高血圧や糖尿病を合併するとその発症率が高くなり、本態性高血圧合併妊娠では軽症(23.4% vs1.9%)、重症(38.0% vs1.7%)、糖尿病合併妊娠では軽症(23.9% vs11.2%)、重症(8.7% vs1.7%)となった。

4. 内分泌疾患(甲状腺疾患):

甲状腺疾患合併妊娠は3373名中55名(1.63%)であり、年齢別頻度は24歳以下で1.1%、25-29歳で1.28%、30-34歳で2.13%、35-39歳で1.34%、40歳以上では2.29%となった。

5. 脳、神経疾患(てんかん):

てんかんの頻度は3373名中20名(0.59%)であり年齢と発症頻度との間に相関関係は認めなかった。また既往妊娠分娩歴、今回の妊娠、分娩経過との間にも特定の関係はなかった。

6. 心、血管系疾患:

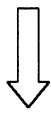
国立循環器病センターにおける1982-1992年の統計より先天性心疾患、弁疾患、脳血管障害について加齢による影響について検討したが、それぞれの疾患による特異性が強く、また手術の有無、経産回数によっても影響され、疾患そのものによる予後の相異はあっても加齢による影響は見い出せなかった。

7) 考察:

今回の検討より年令的負荷要因によって影響される妊娠偶発合併症は子宮筋腫、糖尿病、妊娠中毒症を含めた妊娠時高血圧症が主なものであり、いずれにおいても35歳以上になるとその発症頻度は急増し、かつ母児の予後も悪化する傾向を認めた。従って、今後これらの偶発合併症に限定し、母児の予後との関係について詳細に検討する必要がある。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1)要約:

加齢に伴って増加する妊娠時偶発合併症には糖尿病(特に妊娠性糖尿病)、妊娠中毒症、子宮筋腫があり、いずれも加齢とともに直線的に増加した。またこれらにおける母児の予後を見ると 30-35 歳以上では胎児仮死や児の小児入院が増加し予後不良となった。